

山口病院 広報誌 やまぐち

スペシャルインタビュー

医学博士 内科部長 吉川 武志

プロフィール

岐阜大学医学部附属病院第一内科、岐阜市民病院、一宮市立木曾川市民病院で勤務。2013年4月、山口病院内科部長(内科・消化器科担当)に。日本内科学会認定医、日本消化器病学会専門医。



高齢化や医学の進歩によって、内科の役割はさらに高まります

— 山口病院についてどんな印象を持っていますか？

非常勤医師として長く理事長や院長の仕事ぶりを拝見してきましたが、おふたりとも医者のスーパーマン。大病院でも難しいとされ転院してきた患者さまを、回復へ導く症例を間近で拝見するたび、すごいなあと感心させられます。

またスタッフが明るくて、とても雰囲気がいい。「家族を想う気持ちを大切にしたい」という理事長の教育理念が、しっかりとスタッフに浸透しているのだと思います。

— これからの「内科」の役割について、どのようにお考えですか？

高齢化が進むことによって手術をできない方が増えますし、がんについても手術ばかりが治療ではなくなっていくでしょう。そうすると、内科のやるべき領域は増える可能性が高いと考えています。

— 最近、内科すべてを診る「総合内科」という言葉をよく耳にするようになりました。

もともと私は、内科医であるかぎり消化器も循環器もすべて関わってくると考えていたので、「内科のジェネラリスト(多方面の知識を持つ人)」を目指して、内科全般を幅広く実践で学んできました。ですから、総合内科という方向性は当然の流れだと受け止めています。

— 内視鏡検査(胃カメラ)も担当されていますが、この検査の重要性についてお聞かせください。

がんの早期発見はもちろんですが、逆流性食道炎、胃潰瘍、ピロリ菌などの治療にも有用なので、QOLの向上や改善につながりやすい。しかも今年4月から「NBI内視鏡※」と

いう新しい機器が導入され、検査における解像度が大幅にアップしました。通常では見逃してしまうような微細なものも捉えることができ、がんの発見率もさらに高まると思います。

— 鼻から挿入する「経鼻内視鏡」の人气が高まっているようです。

たしかに、経鼻内視鏡はスコープが細くて、ラクに検査を受けられる点が魅力です。ただし医者立場からいうと、見やすさの点では、スコープを口から挿入する「経口」のほうが優れます。特にご希望がなければ、医者としては「経口」をお勧めしたいですね。

— これからの目標をお聞かせください。

山口病院は外科としての歴史がある病院です。その強みを活かしながら、内科的な診療もぜひ充実させていきたいですね。そして、近隣にある大病院の先生方との関係をいっそう強化し、今まで以上に地域の患者さまに役立てる病院になっていきたいと思っています。



近接拡大(NBI)で撮影された胃画像

※NBI内視鏡
Narrow Band Imaging(狭帯域光観察)。特殊な光を当て、粘膜表面の血管や粘膜の微細模様であるピットパターンなどを強調表示する光学的な画像強調技術。